

二 生涯教育と高校段階の教育課題

池 田 秀 男

(広島大学)

多々納 道 子

(島根大学)

1 調査研究の目的

1980年5月1日現在における文部省調査の結果によると、本年度の高校への進学率は全国平均で94.2%だという。この高校につづく大学段階への進学率も高い。しかし、同世代人の多数は、高校を学校型教育の最終段階としている。

生涯教育の具体化という観点から考えた場合、この初発的教育の最終段階が終了するまでに、学校型教育は何をどのように準備しておかなければならないのか。その解答は、一般的には、学校後教育への準備教育だといわれる。このような理念的水準においては、生涯教育における学校教育の役割や課題は、これまでにかなり論議されてきている。しかし現実には、現在の学校が、では生涯教育の観点から見た場合、何をどのように準備しているのかということになると、今までのところ、この問題に対する解明は驚くほど遅れているように思える。これではどんなに生涯教育論を説いてみても、確かな立論の根拠と実践への手がかりを得ることはできない。⁽¹⁾

この調査研究はこのような問題意識から計画した。学校型教育として特に高校を取り上げたのは、多くの人びとにとって高校が学校型教育の最終段階にあたり、この段階で何がどのようになされているかの解明は、学校後の教育について考えるさいの重要な判断材料を提供すると思われたからである。

ところで、生涯教育は、一方で学校後の教育の継続を主張し、他方で教育を学校に限定せず、学校教育と学校外教育の連携を要求する。学校教育と学校後教育の統合は変動社会に対処するための要請であり、学校教育と学校外教育の統合は、社会のあらゆる教育機能が有機的に役割分担する必要からきている。すなわち、生涯教育の理念は、すべての者がいつでもどこでも教育を続けられるような観点から教育を統合的に再構成しようとするものだといえよう。

この調査研究は、高校段階の教育が、このような生涯教育の垂直的次元と水平的次元の両統合原理に照らして見るとき、現在そのための基礎をどのように準備し、またどんな解決すべき教育課題を内在しているかについて構造的に明らかにしようとするものである。

この調査研究の計画において特に留意したのは、次の2点である。第1に、高校教育を通しての生涯教育への準備作業は、生徒の中に、いつでも、どこでも学習をつづける主体的条件を創出することである。しかし、主体的条件は、それだけを孤立化して取り出したのでは、その形成の手がかりを得ることができない。そこで第2に、主体的条件の形成を客観的な教育の機会との関連で明らかにするよう配慮した。調査研究結果の見通しとして、一定の教育の機会が一定の主体的条件の形成に関与している事実関係を明らかにした上で、どのような教育機会の拡充策がどういった生涯教育への主体的条件の形成にかかわるか、このことについての判断材料の提供を意図している。

2 調査研究のフレーム

この研究は、高校段階までの学校教育を通して、生涯教育の実現に必要とされる基礎作業がどのように達成されつつあるかを実証的に明らかにしようとするものである。このことは何を手がかりに明らかにできるであろうか。

今日の学校は、社会化と選抜配置の二つの機能をもっている。この考えを

高校段階に当てはめると、中学校における社会化の結果に対する評定に基づいて、生徒はそれぞれの能力や適性に応じて特定の高校の教育課程の中に選抜配置される。そのさい、生徒にどのような教育機会が開かれているかは、地域の国公立の分布や普通科と職業科の定員配置だけではなく、それらの高校への入試選抜が単独になされるか、総合的になされるかなど、学区制や選抜制によっても、機能的に異なる意味をもつ。その結果、高校レベルの地域的教育機会は多様に構造化されているが、選抜配置された生徒の教育にとって重要なのは、提供された教育機会がそれぞれの生徒に対してもつ意味であり、それに対する生徒の「表現的環境」としての自己規定である。というのは、生徒に対して有意的に働きかける教育機会の諸条件のみが、学習媒体としての機能を発揮するからである。

このような仮定に立って、この研究では、所属する生徒の中に表現（認知）されている教育機会を、彼らの高校教育を捉える基礎的枠組として設定した。この意味における教育機会は、制度的特徴や入学する生徒の学力の高さや卒業生の大学進学状況などによって特徴づけられるものとは異なり、生徒自身によって内面的に構造化されるところに特徴がある。その結果、一定の客観的指標のもとに見ると、かりに優秀な高校であっても、特定の生徒にはその同じ高校が低く見られているということがある。そして現実的には、高校教育の機会は、設置母体の差異による教育方針の違いや専攻する教育課程の学習内容の違いやその機会への接近の困難度などによって、明らかに異なる意味をもっているが、理念的には、それぞれ選抜配置された生徒の自己形成にとって最適の条件を具備していることが期待される。

このような観点から見るとき、問題になるのは、高校の外部的属性ではなく、内面化された属性であり、在籍課程や選抜性の高さなどに関係なく、教育機会は、その教育機会の構成要素に対する生徒の自己規定に基づいて構造化することができる。この研究の第1のフレームは、こうした考えのもとに一定の調査手続によって構成した「教育機会」を与件としている。結果的には、この意味における教育機会は、生徒から見た高校の社会的地位の高さに

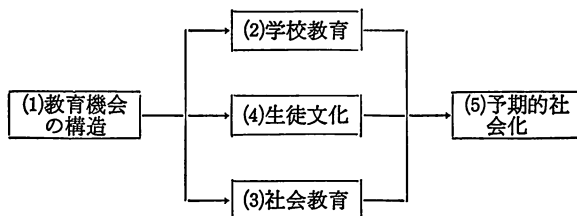
よって階層的に構造化されており、所属する高校の社会心理学的地位を意味している。

次の問題は、そのようにして構造化された教育機会が現在どんな教育機能を遂行しているかの解明である。この点について、この研究では、高校段階の教育領域を、学校内の教育と学校外の教育に分節化して、それぞれの教育セクターにおける教育達成の実態を追跡することにした。これは明らかに生涯教育という学校教育と社会教育の統合原理を前提としており、その原理に照らして見るとき、現在の高校教育はこれら二つの領域で何をどのように達成しつつあるかを明らかにするためである。これら二つの高校段階の教育領域、すなわち学校教育と社会教育を、高校の教育機能をとらえる二つのフレームとして位置づけた。両セクターの教育は生徒の生活の中では相互に浸透し合っており、学校教育での取り組みや達成は決して学校外教育でのそれらと無関係ではないと仮定した。また、上述の第1のフレームとこれら二つのフレームとの間には、生徒に認知された教育機会の構造はその認知や自己規定を通して、それぞれの教育領域における当該生徒の学習活動に機能的な結びつきをもつものと考えられる。

次に、本研究の第4のフレームとして「生徒文化」を位置づけた。この部分は、与えられた教育の機会によって、例えば、それが生徒に知的興奮を与えたり、明るい将来への見通しを提供するものであるか否かによって、直接的にインパクトを与えられる面と、学校内外の教育活動への関与の仕方や程度によって規制される面とをもっている。しかし、学校内外の教育活動への関与の仕方や程度は逆に、生徒文化によって規制される面があり、両者はいわば相互作用的關係にあるものと見てよからう。そして最後に、これらすべての機能関連のアウトプットとして生涯教育に対する基礎的態度の形成を位置づけた。この部分は、生徒の中に創出されつつある学校卒業後への見通しや展望に関係しており、生涯教育への「予期的社会化」の帰結として取り扱うのが適切であろう。これは、いうまでもなく、生涯教育における学校教育と学校後教育の統合原理に照らして設けられたフレームである。

以上、この研究では五つのサブ・フレームから研究のフレームを構成している。各フレームの相互関係を図示すれば、図1のように示すことができるであろう。

図1 調査研究のフレーム



3 調査研究の結果の考察

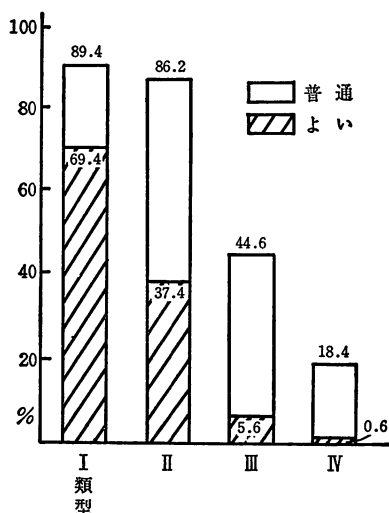
(一) 教育機会の構造

いま高校生は自己の在籍する高校をどのように見ているだろうか。この問題に対する生徒の認知の実態を明らかにするために、今回の調査では「学校の施設や設備」「教師の質」「生徒の質」および「学校に対する社会からの全体的評価」などに関して、それぞれ「よい」「普通」「よくない」という3選択肢を用意して、生徒の反応を求めた。その結果、これらの項目のうち「施設や設備」への反応以外では、類似の反応パターンが明らかとなり、「学校に対する社会からの全体的評価」への反応は、高校の地位構造を最も包括的に示す指標として役立つことが明らかとなった。

今回の調査対象はA県高校2年終了時の生徒2,834人⁽²⁾で、「学校に対する社会からの全体的評価」に対する彼らの評価の高いものから低いものへ反応結果を配列した結果、学校の地位を典型的に代表すると思われる4類型の高校を抽出することができた。その調査結果を示したのが図2である。

I 類型は調査対象として抽出した14校のうち、生徒による自己評価の最も

図2 高校の社会的地位



高い高校であり、逆にIV類型はそうした評価の最も低い高校である。他の2類型は、生徒の評価の高さを尺度にした場合、これらI類型とIV類型の間に位置する典型的な高校を抽出したものである。数的に最も多いのは、II類型とIII類型の高校で、I類型とIV類型は数的に少ない。最も少ないのはI類型である。また、あまりに社会的自己評価の低いと思われる高校では調査への協力を得ることが困難であるため、IV類型を今回の調査結果の一方の端に位置づけているが、現実には、これ以下の

評価しか得られない高校はそう少なくないように思える。

この調査結果は、現在、在籍する高校の教育機会が当該生徒の立場から見ると、いかに階層分化した構造から成り立っているかを示している。このような面で「社会からの全体的評価」が「よい」と答えた生徒の割合は、I類型とIV類型の間では115.7倍もの差が見られる。その傾向は「普通」への反応を含めた場合でも、変わらない。その結果、III類型とIV類型では、過半数の生徒は、社会的評価の「よくない」と思う高校に在籍させられている。

このような調査結果を幾つかの項目について、マイナス評価（「よくない」）の面から示すと、表1の通りである。「施設設備」に対するII類型の反応を

表1 在籍高校に対する評価
(普通よりよくない)

対象 \ 類型	I	II	III	IV
	%			
施設や設備	21.1	63.0	27.1	39.7
教師の質	9.4	26.1	42.9	46.6
生徒の質	10.6	26.5	44.6	51.7

別とすると、他のすべての反応は、どの項目に対してもI類型からIV類型へと上昇している。

この研究は、このような教育機会の階層構造を前提とし、それぞれの教育機会を与えられた生徒の心の中

で今、何が起こりつつあるかを明らかにしようとしたものである。この意味では、これは、この教育機会への自己評価の結果を独立変数とし、それぞれの教育機会のインパクトを生涯教育の文脈において測定しようとする試みだといつてよい。⁽³⁾

(二) 学校教育の実態

階層分化した教育機会の中で、各生徒はどのように教育活動に参加しているだろうか。まず学校教育サイドについて、「授業への参加の状況」と「授業への満足度」と「学習へのモラル」という三つの面から明らかにしよう。

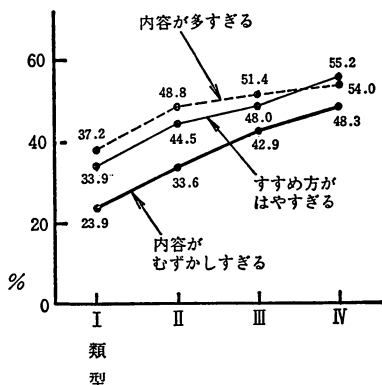
高校教育の中で授業についていけるかどうかは、その成否を問う鍵となる。授業への参加について、(1)授業の内容はむずかしすぎるか否か、(2)授業の内容は多すぎるか否か、(3)授業のすすめ方は、はやすぎるか否か、という三つの面から設問し、それぞれ水準と量と速度に関して3段階の選択肢を用意して反応を求めた。その結果、図3

に示すように、授業のどの側面においても、困難を感じている生徒は、I類型の高校で最も少なく、II類型、III類型、IV類型へと、教育条件として当該学校の提供する教育機会が低い自己評価を受けている高校ほど、授業に対して困難を感じている生徒が多くなっている。しかも三つの側面に対する反応は、同じパターンを示しており、授業

への参加をはばむ要因は、重なり合って作用するもののように見える。しかし、授業への参加をはばむ3要因の中では、「内容が多すぎる」という理由が最も多く、ついで「すすめ方がはやすぎる」と「内容がむずかしすぎる」という順序で少なくなっている。

この調査結果は、I類型の高校では約70%が授業に比較的抵抗なく参加し

図3 授業からの脱落状況



ているのに対し、Ⅳ類型では約50%が授業過程から脱落していることを示している。これは、今日の高校教育が現代社会における生存のための基礎教育となりつつあり、かつ学校後教育への知的準備という点から見て、現代の高校教育における問題の所在を示唆している。

では、どんな教科がむずかしいのであろうか。現在高校で受けている授業科目のうち、最も難しい科目は何かについて回答を求めた。その結果、表2に示すような反応が得られた。これによると、学校類型によって難しい教科に

表2 教科の難解度（難しいと思っている教科としての指摘率）

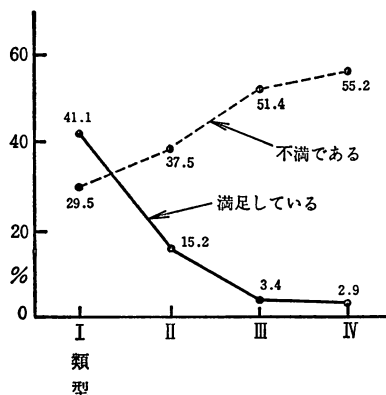
類型 教科	I	II	III	IV
	%			
国 語	45.6	30.3	23.2	9.2
数 学	65.0	63.5	72.9	54.6
社 会	14.4	19.4	42.4	23.6
理 科	58.9	73.5	33.9	40.2
英 語	62.2	67.8	49.2	56.3

差異があるが、大体過半数以上が、難しい教科として共通に指摘しているのは「英語」と「数学」である。これに対して難しい教科としての指摘の少ないのは「社会」である。「理科」や「国語」はⅠ類型とⅡ類型の高校の方が、難しさを指摘する生徒が多く、Ⅲ類型とⅣ

類型の高校では、そういう指摘が少なくなっている。こうした分布の差は、各学校類型によって教科の位置づけや水準が異なることを示唆している。

ここで見た教科別の困難度は、必ずしも教育的問題と結びつかない。というのは、それは教育活動を通して克服すべきハードルとして計画されている

図4 授業に対する満足度



かもしれないからである。しかし、そうした困難感が授業過程からの脱落現象と結びつくと、学校機能不全を招くことになり、それに対する「治療的教育」なしには、生涯教育への準備は達成されない。

授業からの脱落や教科の困難性は、学校での授業に対する満足感と関係があるように思える。この関連で現在の高校の授業全体に対する満足ないし不

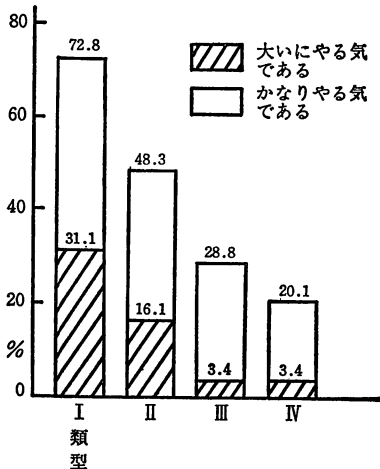
満足の状況について調査した結果、図4のような回答が得られた。この調査結果によると、不満だという生徒の割合は、Ⅰ類型からⅣ類型へ行くにつれて増大し、逆に「満足している」という生徒の割合は、Ⅰ類型が最高で、Ⅳ類型が最低となっている。そしてⅠ類型以外の高校ではすべて、授業に対して不満をもつ生徒の方が、満足している生徒を大幅に上回っている。特に、Ⅲ類型とⅣ類型の高校では、少なくとも過半数は、はっきりと「不満」を表明しており、これらの高校類型における授業は再検討する必要があるように思える。

図4の調査結果とさきに見た図3のそれとを重ね合わせて見ると、授業への満足度は授業過程への参加度と関係があり、逆に授業への不満は授業過程からの脱落現象と結びついているように思える。

授業過程からの脱落現象が固定化し日常化してくれば、単に授業への満足感の減少と不満の増大を結果させるだけでなく、遂には「やる気」そのものまで疎外されてしまうであろう。これは、多くの学習心理学の研究結果が明らかにしている仮説と一致している。この関連で今回の調査では、現在の学習に対する取り組み方について、どの程度「やる気」を持っているかについて測定を試みた。

図5 学習モラル

図5はその調査結果を示している。「大いにやる気である」生徒も「かなりやる気である」生徒も、ともにⅠ類型の高校で最も多く、Ⅳ類型で最も少なくなっている。この調査と、上述の授業からの脱落と授業への不満に関する調査結果を重ね合わせて考えると、「やる気」は構造的には、教育機会の構造上の地位によって決定されているが、技術的には授業過程に積極的に組み入れられているか否かによって大き

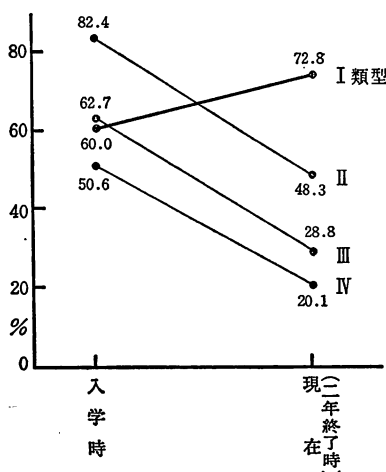


く左右されるもののように思える。しかも問題なのは、構造的な地位の低さが授業技術上の不備と結びついて、学習モラルの剝奪的效果を生み出していることである。

この関連で、どうしても明らかにしておかなければならないのは、一体、現在の高校は、入学した生徒を学習に対して一日一日と積極化する機能を果たしているのか、それとも消極化する機能を果たしているのかの確認である。前者は、E. ホパー (Hopper) のいわゆる「ウォーミング・アップ機能」(warming-up function) に当たり、後者は「クーリング・アウト機能」(cooling-out function) に関係している。彼が教育体系の両機能の分析において示した仮説によると、一方で与えられた教育機会がどの程度リジッドに固定化されており、他方で社会移動の可能性がどの程度開かれているかによって、当該体系に組み込まれた生徒の野心は、暖められたり、冷却させられたりするというのである。⁽⁴⁾

この仮説を参考にしながら、現在の日本の高校生のおかれている状況を明らかにしよう。このことを明らかにするために、今回の調査では、一方では高校入学時の学習モラルを調査し、他方で高校2年終了時の学習モラル

図6 学習モラルの変化



を調査している。したがって、この両時点におけるモラルの変容を追跡すれば、現在の高校が「ウォーミング・アップ機能」をもっているか、それとも「クーリング・アウト機能」をもっているかを明らかにすることができる。

図6はこうした意図のもとに、調査結果を図示したものである。入学時に比べて現在学習モラルが上昇しているのは、I類型の高校だけで、他の類型ではすべて入学後の時日がたつにつれて現在の高校は生徒の「やる気」を

失わせつつある。しかも、入学時に学習モラルの低かった生徒群は益々それを低下させる傾向がある。

こうした調査結果は、生涯教育への準備作業という点ではもちろん、それ以前の高校教育自体の在り方としても、問題を提起している。

以上は、与えられた教育機会が学校の教育課程内でどんな機能を果たしつつあるかについて概観したものである。では、これとの関連で現在の教育機会は、学校外教育の面ではどのような機能をもっているだろうか。これが次の問題である。

(三) 社会教育の実態

学校内での学習への取り組みの違いは、学校外での教育活動にどのような影響を及ぼしているだろうか。この問題を考える場合に示唆を与えるのは、一般に労働における個人の位置づけや役割が当該個人の余暇時間の過ごし方や活動内容を規制しているという仮説である。⁽⁵⁾ この仮説がもし高校生にも適用されるとすれば、その範囲内において、学校内教育に積極的な生徒は学校外教育においても積極的だと仮定してよからう。その逆もまた真であろう。

こうした仮定に立って、ここでは「家庭学習」と「地域活動」と「余暇活動」という三つの側面を取り上げる。

まず家庭学習について、学習時間の面と自己学習の内容の面の両面から、学校での教育機会の違いがこれらの面でどんな差異をもたらしているかを明らかにしよう。

表3は、平日の家庭における勉強時間を学校類型別に、時間の短い者から長い者へと累積分布したものである。I類型とII

表3 家庭学習時間の累積分布

学習時間 \ 類型	I	II	III	IV
	%			
0時間	1.7	2.4	23.2	29.9
1時間以内	11.7	17.1	82.0	73.6
1.0～2.4時間	33.4	40.3	92.2	85.1
2.5～3.4	69.5	74.4	96.2	90.8
3.5～4.4	92.3	89.1	96.8	91.4
4.5～5.4	96.2	95.3	96.8	92.0
5.5～6.4	98.4	97.2	97.4	93.1
6.5～7.4	98.4	97.7	97.4	94.2
7.5以上	99.0	97.7	97.4	94.8

類型の高校には、家庭での勉強時間0という生徒は皆無に近いが、Ⅲ類型とⅣ類型の高校にはそういう生徒が20～30％見られる。さらに、Ⅲ類型とⅣ類型では、1時間以内に70～80％が含まれ、それより長い時間家庭学習している生徒は10数％にすぎない。しかし、Ⅰ類型とⅡ類型では、平日の家庭学習平均2.4時間以内という生徒は30～40％どまりで、過半数は2.5時間以上、勉強している。

高校類型別の平均学習時間は、Ⅰ類型3.28時間、Ⅱ類型3.07時間、Ⅲ類型1.06時間、Ⅳ類型1.18時間となっており、Ⅰ類型およびⅡ類型とⅢ類型およびⅣ類型の間には、約3倍の差が見られる。この時間差は、日常的なものであるだけに、学校外教育活動の上に累積的效果の差となって表現されるものと思われる。

次に、そのような時間を用いての自己学習の内容を知るために、「最近1か月くらいの間に読んだ本で、記憶に残っているものがあれば、どんな種類の本でも結構ですから、その本の名前を3冊まであげてください」という設問を試みた。この設問に対する回答結果を整理したのが、表4である。

表4 自己学習の内容（読書傾向）

本の種類 \ 類型	I	II	III	IV
マンガ、週刊誌、雑誌	9.4%	4.7	37.3	27.6
文学、小説、伝記	43.9	29.9	19.8	13.2
評論、随筆	4.4	2.4	0	0.6
学術書、科学、芸術、哲学などの入門書	2.8	0	0	0.6
生活技術、趣味、実用書	7.2	1.9	2.8	5.2
学 習 書	2.2	1.4	0	0
そ の 他	0.6	0.9	0	0
2種類以上にわたるもの	3.9	18.0	2.8	2.3
記憶に残っている本を回答できなかった者	25.6	40.8	37.3	50.6
1か月間に読書した平均冊数	1.75冊	0.84	1.53	0.91

読書傾向にも明らかに学校類型による差が見られる。すなわち、Ⅰ類型とⅡ類型の高校では、「文学、小説、伝記」などがそれぞれ約40%と30%の生徒に記憶にとどまるくらい読まれているが、同じカテゴリーの本はⅢ類型で約20%、Ⅳ類型で約10%の生徒にしか読まれておらず、後者の2類型に所属する生徒の中で最もよく読まれているのは「マンガ、週刊誌、雑誌」などである。

さらに、この設問に対して回答できなかった生徒がかなり多い。Ⅰ類型では該当生徒は25.6%であるが、Ⅱ類型とⅢ類型では約40%、そしてⅣ類型では50%以上が1か月くらいの間の読書生活を振り返って1冊の本の名前さえ記憶にとどめておらず、回答できなかった。

また、1か月間に読書した平均冊数は最高でⅠ類型の1.75冊であり、せいぜい2冊どまりというところである。この調査結果とさきの学習時間調査の結果を重ね合わせて考えると、このような教養のないし趣味的な読書の時間は相対的に少なく、家庭での学習時間の多くは教科書や参考書関係の学習に充当されているものと見られる。

地域活動の面では、地域の団体活動や集会活動への参加状況と社会教育施設を利用した学習活動の両面から、過去1年間の活動実態を追跡した。

地域の団体活動や集会活動については、12項目にわたる活動リストを提示し、過去1年間に参加したことのあるものすべてに○をつけてもらった。その結果によると、この方面での高校生の活動状況は全般的に低調である。すなわち、各項目別の全体の参加率は、「海洋少年団」0.5%、「ボーイスカウトやガールスカウト」0.8%、「地区青少年協議会や社会福祉協議会」0.8%、「地域青年団」1.9%、「YMCA や YWCA」2.9%、「ボランティア活動」2.9%、「地域での講演会や講座」4.4%、「子ども会」7.7%、「展示会」10.0%、「地域の運動会」13.1%、「音楽会」16.3%および「地域のお祭りや盆踊り」25.6%となっている。これら12項目のうち、参加率の相対的に高い3項目について、学校類型別に参加状況を検討すると、「地域のお祭りや盆踊り」への参加率には学校類型間の差がなく、どの学校類型の生徒の

中にも4人に1人くらいの割りで、この地域活動への参加が見られるが、「音楽会」はⅠ類型とⅡ類型で参加率が高く、「地域の運動会」はⅢ類型とⅣ類型の生徒の参加率が高くなっている。すなわち、これら2項目において学校類型による特徴的な差が見られる。「音楽会」はより広域的な文化活動であるのに対して、「地域の運動会」は逆により土着的な地域活動であり、両者の活動は異なった性格をもっている。

他方、地域の社会教育施設を利用した活動状況については、13項目にわたる施設リストを提示し、過去1年間に利用したことのあるものすべてに○をつけてもらった。その結果によると、「勤労青少年ホームや勤労青少年センター」4.2%、「ユースホステル」5.5%、「校庭開放や教室開放」11.3%、「青少年センター」11.9%、「音楽堂」12.3%、「少年自然の家や森・自然遊歩道」15.9%、「公民館や集会所」18.6%、「美術館や博物館」28.5%、「地域の体育施設やグラウンド」30.4%、「市民会館や文化センター」34.2%、「学校外の図書館」47.5%、「公園や遊園地」55.3%、および「その他の社会教育施設」1.6%となっている。

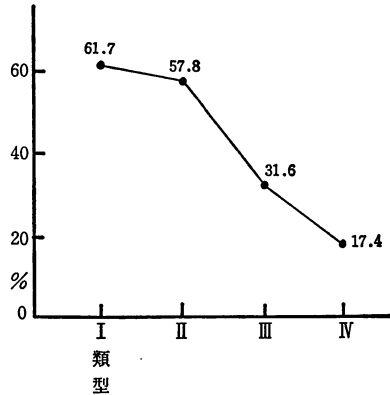
これら13項目のうち、利用率の相対的に高い(20%以上の生徒が利用している)五つの地域施設について、学校類型別に利用状況を検討すると、「公園や遊園地」と「地域の体育施設やグラウンド」の利用率では、ほとんど学校類型間での差が見られない。しかし、「美術館・博物館」はⅠ類型の生徒に偏ってよく利用され(46.3%)、その他の類型の生徒の利用率はせいぜい13~14%であるのに対し、「市民会館や文化センター」は逆にⅢ類型とⅣ類型で高い利用率(約30%)があり、Ⅰ類型とⅡ類型での利用率は約10%と低くなっている。

「美術館・博物館」と「市民会館や文化センター」の比較では、前者がより専門的施設であり、より広域的ないし脱地域的に利用されるものであるとすれば、後者は総合的地域施設であり、より地域的に利用される施設である。こうした施設の性格規定と学校類型別の特徴的反応を結びつけて考えると、地位の高い高校の生徒の方が、このような地域施設の利用圏がより広域

のかつより専門的だといえるかもしれない。この仮定は、さきに見た地域の団体活動や集会活動への参加の面でも、かなり当てはまるものと思われる。その典型例として「学校外の図書館」の学校類型別の利用率の分布をあげることができる。

図7に示す調査結果によると、学校外図書館の利用率はⅠ類型では61.7%であるのに対して、Ⅳ類型での利用率

図7 学校外図書館の利用率



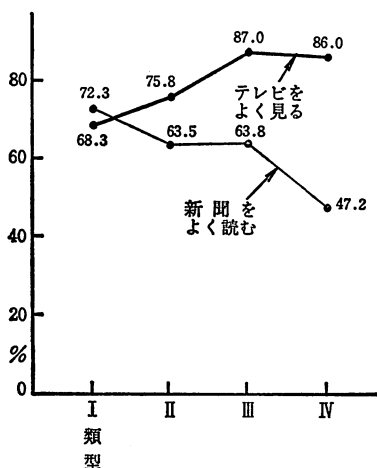
は17.4%となっており、両類型の生徒の利用率の間には3.5倍の開きがある。しかも、学校の自己規定的地位が低くなるにつれて、その利用率は規則的に低下する傾向が見られる。

では、余暇時間の利用の仕方の中では、どのような特徴が見られるだろうか。このことを明らかにするために、高校生の余暇の過ごし方として考えられる11項目の余暇活動リストを提示し、それぞれの活動に対する利用度を4段階尺度を用いて回答してもらった。その調査結果によると、余暇に「よく見たり、聞いたり、行ったり、している」（例えば、「非常によく見る」と「かなりよく見る」の合計）高校生全体の項目別分布は、「テレビ」81.0%、「音楽やレコードかんしょう」70.8%、「新聞」60.2%、「ラジオ」59.6%、「デパートやスーパー」58.3%、「商店街」43.0%、「深夜放送」35.0%、「楽器の演奏」24.4%、「映画館」20.5%、「ゲームセンター」16.9%および「その他」13.7%となっている。

余暇活動としての利用率の高い（50%以上の高校生が利用している）五つの項目について、学校類型別に活動状況を検討すると、「音楽やレコードかんしょう」と「ラジオ」と「デパートやスーパー」の3項目の利用率には差がないが、「テレビ」と「新聞」の利用率には学校類型別に傾向的な差が見られた。

図8は「テレビ」と「新聞」の利用度を学校類型別に分布したものである。「テレビ」は高校の自己規定が低いほど、よく見られており、「新聞」は逆に地位が高いほど、よく読まれている。これら2項目は、活動内容として映像メディアと活字メディアという対照的な性格をもっており、この調査結果は、学校類型によって生徒が最頻的に接触するメディア類型が異なることを示唆している。

図8 テレビと新聞への接触状況



「テレビ」に自己の生活を不均衡なほど食われるのは、Ⅲ類型とⅣ類型の生徒である。

このような傾向に対して、これまで見てきた調査結果から一つの結論を導き出すとすれば、高校における授業に積極的に組み込まれている生徒群は、学校外の活動においてより知的精神的な文化活動 (high culture) に関与し、活字メディアのようなより能動的な余暇活動を行う傾向があるのに対して、高校の授業から脱落し、学校教育によ

り大きな不満をもつ生徒群は、学校外の活動においてより通俗的な文化活動 (popular culture) に関与し、映像メディアのようなより受動的な余暇活動を行う傾向があるといえる。この結論は、高校生文化の階層分化を予想させるが、その面ではどうであろうか。これが次の研究課題である。

(四) 生徒文化

これまで見てきたように、学校内外の高校生の生活実態は高校教育機会の階層的地位によって傾向的な差異がある。これを前提として考えると、それらの内外の教育・学習経験の結果として生徒の中に創出される価値志向や欲求性向にも、十分に学校類型別の傾向的な差異が存在することを予想できよう。逆に活動主体の側から見ると、これまで学校類型別に明らかにしてきた

学校内外の活動実態の差異は、異なる価値志向や欲求性向をもつパーソナリティがそれらの教育機会に配置された結果の一表現だとも見られる。この両面から考えると、生徒文化は高校にインプットされた一定の生徒のパーソナリティと、それを取り巻く内外の環境条件との間の相互作用の所産として見るのが適切であろう。

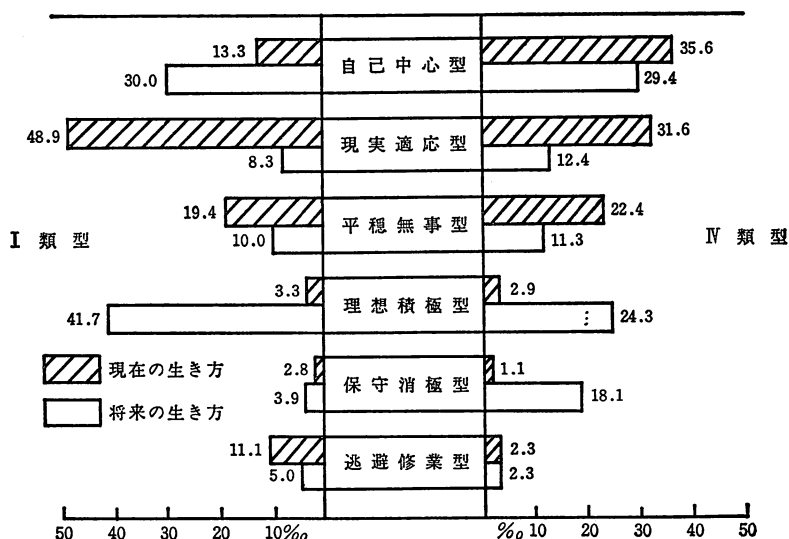
ここでは、このような関連における生徒文化の実態について、一般的な「価値志向」と「文化的逸脱性」の二つの面から明らかにする。すなわち、まず生徒のパーソナリティに内面化されている価値や行動を明らかにした上で、これに当該パーソナリティを内包する教育機会の諸特徴との関連性を機能的に結びつけて解釈するという外在的接近法を試みる。

生徒の「価値志向」については、次のような6選択肢を与え、「現在の生き方」および「将来の生き方」として、それぞれの生き方が生徒の気持ちに最も近いかを選択してもらった。なお、括弧内の表示は以下の説明で使用する略称である。

- (1) 世間の目を気にせず、自分のやりたいことを楽しむ(「自己中心型」)
- (2) 現状に甘んじ、与えられた範囲で自分の生活を楽しむ(「現実適応型」)
- (3) 世の中のことは、なりゆきにしたがって、その日を平穩に過ごす(「平穩無事型」)
- (4) よりよい社会の実現をめざして、積極的に努力する(「理想積極型」)
- (5) いまの社会を大切にし、それを守ることに努める(「保守消極型」)
- (6) 社会とのかかわりになるべく避け、ひたすら修業にはげむ(「逃避修業型」)

この設問を用いての調査結果のうち、煩雑をさけるため、I類型とIV類型に所属する生徒の反応結果だけを抽出して示したのが図9である。「現在の生き方」としてI類型では、「現実適応型」と「平穩無事型」と「自己中心型」が最も多く、全生徒の81.6%がこのような生き方を求めているが、IV類型で多いのは「自己中心型」と「現実適応型」と「平穩無事型」で、それら3項目への反応合計は89.6%を占める。両類型の反応は、これら3項目に集

図9 価値志向の型



中している点では共通性があり、その限りにおいて、現代社会における高校生の位置づけや生活実態の世代特徴を示している。しかし、分布パターンとしては、I 類型の生徒の半数近くが「現実適応型」に集中しているのに対して、IV 類型では「自己中心型」と「現実適応型」に分散しているのが特徴である。

「将来の生き方」としては、I 類型では「理想積極型」と「自己中心型」が全生徒の71.7%の支持を集めており、IV 類型では「自己中心型」と「理想積極型」に全生徒の53.7%が集中している。この場合にも、IV 類型の生徒の反応は分散的である。これは「現在の生き方」についても指摘した特徴である。その一つの理由として、I 類型に比べてIV 類型の生徒の方が価値観が多様化しているともいえるが、IV 類型は外在的には自己のエネルギーを焦点化でき難い状況におかれており、その結果、特定の生き方に強くコミットすることを抑制されているという解釈が可能であろう。

「現在の生き方」と「将来の生き方」との比較では、どんな特徴が見られるであろうか。I 類型の生徒は「理想積極型」と「自己中心型」が、2 項目

への合計の反応で見ると、16.6%から71.7%へと4.3倍も増大しているのが特徴で、その分だけ「現実適応型」と「平穩無事型」が減少している。これに対してIV類型の生徒で「将来の生き方」への支持率が「現在の生き方」を上回っているのは、「理想積極型」と「保守消極型」の2項目への反応であるが、現在と将来の両次元で最も生徒をひきつけているのは「自己中心型」である。IV類型の生徒の特徴は、両次元の価値志向構造における大きな構造的変化がないことである。

このような反応結果について、本論文脈では次のような解釈をひき出せるであろう。すなわち、I類型の生徒は、現在の生き方としては、「現状に甘んじ、与えられた範囲で自分の生活を楽しむ」と同時に「なりゆきにしたがって、その日を平穩に過ごす」ことを選び、「自分のやりたいこと」は前面におし出さず、「ひたすら修業にはげむ」ことも辞さないが、そうした現在の生き方は「将来の生き方」としての「理想」の追求や「自分のやりたいことを楽しむ」ための基礎工作である。その限りにおいて、I類型の生徒の現在の生き方は、「現状に甘んじ、与えられた範囲で自分の生活を楽しむ」といっても、小康に安んじるというよりも将来の理想実現のための抑制された現状への適応形式であって、一種の禁欲主義的色彩を内包している。これに対してIV類型の生徒は、将来よりも現在「自分のやりたいことを楽しむ」ことに重点をおいており、「現状に甘んじ」て「平穩無事」な生き方を選び、将来の生き方として「理想実現型」への支持率は増大しているものの、それと同じように「保守消極型」の生き方も支持されている。相対的な意味でIV類型の生徒は、現在の段階における直接的な欲求充足を志向する傾向があるといえるであろう。

このような解釈が受け入れられる範囲内において、両類型の生徒が示している現在および将来の価値志向の分布パターン⁽⁷⁾の差異の説明には、いわゆる「欲求充足延期」(deferred gratification)の理論が適用できる。その限りにおいて、I類型の生徒の欲求性向は将来に向けて組織化されているが、IV類型の生徒には将来に向けて自己の欲求を組織化し難いような閉塞的状況があ

り、これがかなりの生徒の生活態度に作用しているように思える。その一つの証拠として、Ⅳ類型の生徒は現在志向的でありながらも、現在の状況により大きな不満と疎外感をもち、「生き甲斐」を見だし難い状況におかれている。

この間のメカニズムは、社会心理学的地位によって生徒の価値志向や欲求志向を規制することである。その端的な表現として次の調査結果をひき合いに出せるであろう。すなわち、「あなたはいま苦しくても頑張って、少しでも希望に近い職業についたり、大学へ入ったりしたいと思いますか」という質問に対して、「そう思う」と回答した生徒の割合は、Ⅰ類型からⅣ類型へ順にあげると、 $87.2\% > 82.0\% > 70.1\% > 55.7\%$ となっているのである。

ところで、一方が「未来」志向的であり、他方が「現在」志向的だとすれば、このような価値志向や欲求志向の違いは、現在の具体的な行動形式の上に、どのように表現されているであろうか。このことを典型的行動形式で確認する方法として、今回の調査では、文化的な逸脱性に対して「経験」と「共感」の両次元から接近を試みた。

具体的な行動形式として取り上げたのは、「酒を飲むこと」「タバコをすうこと」「万引き」「シンナー遊び」「フリー・セックス」「高校生の売春行為」「暴走族や暴走行為」

表5 逸脱行動の領域別経験率

領域 \ 類型	I	II	III	IV
	%			
酒を飲むこと	41.1	55.0	74.6	54.6
タバコをすうこと	21.7	18.0	53.1	47.7
万引き	8.9	4.7	27.1	25.3
シンナー遊び	1.7	0.9	3.4	10.9
フリー・セックス	1.1	1.4	10.2	10.3
高校生の売春行為	0.6	0.9	2.8	1.7
暴走族や暴走行為	1.1	6.6	26.6	16.7
高校生の家出	0.6	1.4	5.6	8.6
高校生の自殺	0.6	0.5	2.8	3.4
学校の無断欠席やさぼること	9.4	37.4	31.6	41.4

「高校生の家出」「高校生の自殺」および「学校の無断欠席やさぼること」などである。これらの行動はともに社会的規範や法律によって規制されており、それからの逸脱は「非行」や「不良」としてレッテルが貼られている。しかし、いずれも刹那主義的な快楽や短絡的な欲求充足と結びついており、欲求を

直接的に充足する性向があるか、延期して充足する性向があるかについての価値選択を明確にするためには、格好の刺激的行動形式として役立つように思える。

現在の高校生は、このような文化的な逸脱行動として、何をどのくらい経験しているだろうか。その調査結果を学校類型別に示したのが表5である。

「酒を飲むこと」や「タバコをすうこと」をはじめ、「万引き」「シンナー遊び」「フリー・セックス」「学校の無断欠席やさぼること」に至るまで、その経験率は一般に高校の自己規定的地位の低下とともに増加する傾向がある。その限りでは、これらの「非行・行動」は現在高校が提供している教育機会の構造と関係があり、「構造的非行」だといえるかもしれない。しかし、その出現率は行動形式によって、かなり差があり、飲酒、喫煙、怠学などはかなり浸透しているが、その他の行動領域での出現率は局限されている。こうした領域別の差は、それぞれの行動形式に関連して生徒の中に内面化されている規範意識の強さと、その行動形式に対する社会的制裁の強さに起因しているように思える。

この関連で、経験とは別に、それぞれの行動形式に対する高校生の「共感の程度」を調査した。その結果を示したのが表6である。この調査結果によると、「万引き」や「シンナー遊び」のように、共感度が全体として経験率を下回るものもあるが、総じて共感の次元では経験の次元以上に、より高い支持率が見られる。共感度に関するも

表6 逸脱行動への領域別共感度
(共感できる)

領域 \ 類型	I	II	III	IV
	%			
酒を飲むこと	58.3	62.1	65.0	53.4
タバコをすうこと	26.1	23.7	44.6	43.1
万引き	8.2	3.8	13.5	10.9
シンナー遊び	5.0	1.4	7.4	5.1
フリー・セックス	34.4	22.7	41.2	28.1
高校生の売春行為	15.6	7.1	20.4	10.9
暴走族や暴走行為	23.3	17.5	44.7	28.2
高校生の家出	45.6	31.3	28.8	21.8
高校生の自殺	28.3	20.9	16.9	11.5
学校の無断欠席やさぼること	34.8	36.5	32.2	35.1

う一つの特徴は、経験では学校類型別の傾向的差が見られたが、共感の次元では、その傾向を否定するほどの一般的な同調性が見られることである。こ

の特徴は、現代高校生における潜在的な「非行化」現象の一般化ないし彼らの中への「非行」の浸透化として語られるかもしれない。

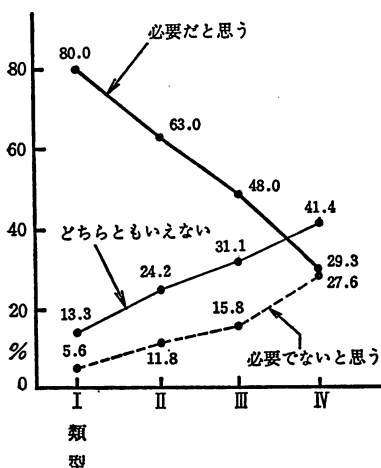
この「非行化」の現象は、これまで立論の根拠としてきた説明原理によると、次のように説明されるであろう。すなわち、現在の高校教育の機会、高い地位への帰属意識をもつ生徒群に対して、ある面では彼らの欲求性向を将来に向けて積極的に組織化しているが、他の面ではそのような組織化を十分に達成していない。一言でいうと、高校教育は生徒の全欲求性向や価値志向を規制したり組織化したりする位置になく、局部的な規制と組織化を達成している。このような構造的説明とは別に、技術的には、これらの行動規範に関するカリキュラム上の希薄性を指摘することができるであろう。

(五) 生涯教育への予期的社会化

最後に、これまで見てきた学校内外の教育および生徒文化の総合的所産として、高校卒業後における生涯教育への態度が、これらの高校教育を通して今生徒の中にどのように予期的に形成されつつあるかについて、「生涯学習の必要性の認知状況」と「生涯学習機会の利用意志」という二つの面から明

図10 生涯学習の必要性認知度

らかにしよう。



「生涯学習の必要性」が現在の高校生にどのように認知されているかを明らかにするために、「社会や文化はますます高度化し、複雑化していくので、今後、高校や大学を卒業しても生涯にわたって学習を続けていくことが必要となるであろう」という見通しを提示し、これに対して「その通りだと思う」「そうはならないと思う」「どちらともいえない」という3選択肢を設けて、どれが「あなたの考えに最も

近い」を回答してもらった。その回答結果を学校類型別に示したのが図10である。図では上記設問に対して「その通りだと思う」と回答したものを「必要だと思う」として表記し、「そうはならないと思う」と回答したものを「必要でないと思う」と表示している。

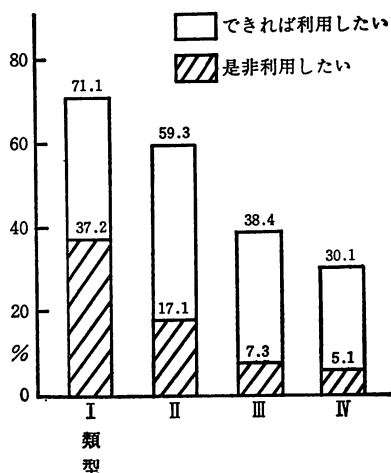
この調査結果によると、実に規則的に、自己規定的地位の高いほど、生涯学習の「必要性」の認知は高く、逆に地位が低くなるにつれて、「必要でない」という認知が増大している。それと同時に、「どちらともいえない」という不確定な意見の分布も、地位が低くなるにつれて増大している。その結果、Ⅰ類型の生徒では「必要でない」とか「どちらともいえない」とかいう意見は最低となっており、Ⅳ類型ではそれらの消極的見方が最高となっている。

次に、生涯学習の機会に対する利用意志については、「あなたは学校や大学を卒業後、社会人のための教育や学習の機会があれば、利用したいと思いますか、思いませんか」という質問を設け、それに対して「ぜひ利用したい」から「全然利用しようとは思わない」に至るまでの5段階の選択肢への反応を求めた。これに対する調査結果によると、図11に示すように、学習機会の利用意志は明らかに地位の高い学

校類型ほど、支持率が高くなっており、逆に地位の低い学校類型では支持率は最低となっている。

生涯学習の必要性の認知の面でも、また生涯学習の機会を利用する意志の面でも、何故、帰属する高校の地位の高さと、このように高い相関関係があるのでしょうか。その理由は、これまで見てきたことから総合的に判断すると、次のように説明できるであろう。すなわち、高い帰属意識をもつ生徒は

図11 学習機会の利用意志



ど、学校内外の教育・学習活動に積極的に関与し、かつ学習に対して積極的な欲求性向を内面化している。その結果として産出された能力や欲求の開発の高さが、高い地位をもつ学校類型の生徒の中に、その後につづく学習の高い必要性認知度と同時に学習機会の高い利用意志を創出している。低い地位の学校類型⁽⁸⁾については、これと丁度逆の説明原理が適用されるであろう。

以上の調査研究の結果は、現在の高校段階の教育が、生涯教育への準備という点から見ると、いかに重大な教育課題を内在しているかを示している。

注

- (1) 辻功「生涯教育論の展開と実践的課題」辻功編『生涯教育の可能性』（教育学研究全集第10巻）第一法規，1976，pp. 1～33，および山本恒夫「生涯教育と学校」文部時報第1212号1978，pp. 28～33。
- (2) この調査研究は、昭和54年と55年の兩年度に文部省科学研究費の補助をうけて実施したもので、詳細は近くとりまとめる予定の同研究報告書、池田秀男編「高校レベルにおける教育機会の地域的構造と選抜機能に関する調査研究」広島大学教育学部参照。
- (3) この小論でいう「教育機会の類型」とは、大体英米でいう tracking ないし streaming に近い概念として使用しているが、統計的集団ではなく、実在する学校集団を意味している。James E. Rosenbaum, *The Stratification of Socialization Processes*, *American Sociological Review*, vol. 40, No. 1, 1975, pp. 48～54; James E. Rosenbaum, *Making Inequality: the Hidden Curriculum of High School Tracking*, John Wiley & Sons, 1976; Brain Jackson, *Streaming: an Education System in Miniature*, Routledge and Kegan Paul, 1965。
- (4) Earl Hopper, *Educational Systems and Selected consequences of Patterns of Mobility and Non-mobility in Industrial Societies; A Theoretical Discussion*; in Richard Brown(ed.), *Knowledge, Education, and Cultural Change: Papers in the Sociology of Education*, Tavistock Publications, 1978, pp. 17～69。
- (5) Graham White, *Socialization*, Longman, 1974, p. 106。
- (6) 吉田昇、門脇厚司、児島和人編『現代青年の意識と行動』NHKブックス1978,

pp.165～168.

- (7) Francis G. Caro, Deferred Gratification, Time Conflict, and College Attendance, *Sociology of Education*, vol. 38, No.4, 1965, pp. 332～340.
- (8) この調査研究の結果によると、学校内の教育的達成の低位性は学校外および学校後の教育の低位性と相関することを示しているが、成人教育活動への「参加率」はそれ以前の学校教育における達成と次のような結びつきがあることが明らかにされている。すなわち、学歴別の成人教育への参加率は大卒28.0%, 短大卒18.1%, 高卒10.7%, 中卒3.5%となっている。資料出所: *Participation in Adult Education, 1978*. National Center for Education Statistics, advance report, February, 1980.

なお、この調査研究は、池田秀男を代表者とする佐々木正治、藤原武弘、津川淳、田頭穂積および多々納道子の共同研究の一部を取りまとめたものである。